

令和5年度 看護の人材育成と活用等に関する連絡協議会 議事録

日時: 令和5年10月23日(月)13:25～15:15

場所: 岐阜県立看護大学 第1会議室

出席者: <委員> 青木京子(公益社団法人岐阜県看護協会会長)、田口路代(地方独立行政法人岐阜県総合医療センター副院長兼看護部長)、國井真美子(市町村保健活動推進協議会保健師部会会長:羽島市)、加藤直子(一般社団法人岐阜県助産師会会長)、高橋陽子(岐阜県訪問看護ステーション連絡協議会会長)、井上玲子(岐阜県健康福祉部保健医療課課長兼健康推進室長)、黒江ゆり子(岐阜県立看護大学名誉教授) 高橋真紀(岐阜県立看護大学修了者代表(大学院同窓会長):揖斐川町)、加藤直子(岐阜県健康福祉部医療福祉連携推進課看護対策監)

<大学> 北山学長、森学部長、松下研究科長、奥村看護研究センター長、土井事務局長、清水学務課長、齊藤企画担当、大野企画担当

* 敬称略

(記録作成: 事務局 大野企画担当)

1. 会長の選出

事務局より「連絡協議会設置要綱」第4条の規定に基づき委員の互選により会長を設置することになっているが、慣例により事務局から、公益社団法人岐阜県看護協会会長である青木京子委員に会長就任推薦が提案され、承認された。

2. 議題

看護学科の教育および卒業者に対する生涯学習支援について

1) 岐阜県における看護職の生涯学習支援に関する概況

北山学長より議題の提案趣旨について説明された。

・本学の卒業生就職状況と卒業生支援の概要

森学部長より、資料1～4に基づき本学の卒業生の就職状況と卒業生支援の概要について説明がなされた。

・卒業生及び上司への面接調査結果の概要

北山学長より、資料5に基づき、卒業生及び上司への面接調査結果の概要について説明がなされた。

・大学院入学・修了状況

松下研究科長より資料6,7に基づき、大学院入学・修了状況、学生及び学生の職場の同僚・上司からの三者評価のまとめについて説明された。

・看護職の生涯学習支援

奥村看護研究センター長より資料8～12に基づき生涯学習支援、県内施設・看護職との共同研究、看護実践研究指導事業、今年度の共同研究報告と討論の会、看護実践研究会会員への研究支援の実績について説明された。

最後に松下研究科長より資料13に基づき、年度別の国家試験合格状況(CNSを含む)について報告された。

3. 意見交換

各委員からの意見、質問等は以下のとおり

田口委員

臨床の現場でも積極的に研究に取り組んでもらいたいと考えているが、なかなか進んでいない現状がある。卒業生への研究支援のようなものはあるのか。

北山学長

過去に卒業生への研究費の助成を行っていた。ただ現在は行っていない。研究支援を受ける場合には、看護実践研究学会の学会員向けの研究支援を受けてほしい。

奥村看護研究センター長

研究の手前段階のディスカッション等を行えるような機会を増やすと良いと考えている。また、研究への抵抗感が強いのはなぜなのか教えていただきたい。

田口委員

研究の大変さだけが先行していると感じている。ただ、研究での学びは非常に多い。その点をいかに伝えていくかも難しい点である。

青木議長

共同研究報告と討論の会のチラシを見て「日々の看護で困っていることや悩んでいることはありませんか？」と記載がある。これがきっかけとなると思う。ただ、研究を行うには倫理審査等の手続きがハードルになっているのではないかと考えている。この部分をゼロからではなくある程度のテンプレートに自分の研究内容を当てはめていくというような形になれば良いと考えている。

國井委員

研究に取り掛かる余裕がないのが現状である。人員不足もあり日々の業務をこなすのでいっぱいである。保健師の研修も定期的に開催しているが、オンライン参加が一般的になり、対面開催に比べ保健師同士の横のつながりが希薄になっていると感じている。

卒業生支援の取組みについて非常に素晴らしい取組みで参加すれば良さは分かるが、日々の忙しさに追われて参加出来ない現状もあると思う。

加藤委員(岐阜県助産師会会長)

資料5で分かった結果から教育現場で何か感じていることがあれば教えていただきたい。

北山学長

対象が卒業後14,15年後の中堅の方としており、それらの方は後輩支援・指導が役割になっている。本学では新卒者や卒後2年目の方を対象とした支援は行っているが、調査結果から中堅の方向への支援も必要だと感じている。

奥村看護研究センター長

キャリアマネジメントに関する研修を試行的に行っている。

高橋陽子委員

就職状況をもみても訪問看護ステーションに新卒で就職することは難しい状況にある。ただ今後は訪問看護ステーションに新卒者が就職できるような状況にすることが連絡協議会としての課題となっている。

卒業生支援について非常に良い取組みだと感じたが、参加者の少なさに驚いた。卒業生同士がコミュニケーションを取る良い機会になると思うので参加者数が増えると良いと思った。

訪問看護で共同研究は保健師と同様難しい現状がある。ただ、在宅医療においては多くの課題もある。大学の教員主導で共同研究に取り組みたいと考えている。

森学部長

共同研究も一つの形であり、ほかに職員の方に大学院に来ていただくのも手である。

共同研究を行う場合には実習等を通して現場の課題を教員が理解すること、それを基にした話し合いを通し、結果、共同研究に発展出来ればと思っている。

高橋真紀委員

現在揖斐川町役場で保健師として働いている。先日実習を受け入れたが、業務量も増えており、例年実習を受け入れられるかどうか検討している状況である。

在宅で新卒者が採用できていないという話があったが揖斐川町も同様の状況にある。県等の協力も得て揖斐川町では経験できないような内容の研修や他職種との交流ができると良いと考えている。

学生へのアンケート結果や面接調査結果の報告から、看護職の皆さんは自分の持っている資格を大事にしていることが分かった。

大学院の卒業生同士の交流の機会もあれば良いのではないかと感じた。

加藤委員(医療福祉連携推進課)

研究となるとハードルが高くなってしまう。実習の受け入れを通して身近なところで問題解決の糸口を見つけて取り組んでいければ良いのではないかと思う。

新卒者や卒業2年目の交流会については参加者が少ないことが気になっている。医療界でもコロナ禍が明けつつあるので、交流会の参加率を上げていただきたい。資料5の中で新卒者や後輩の指導が難しいという卒業生の意見がある。現在新卒者の離職率が上がっている傾向にある。学生もかなり変わってきている。これまでと同じ教育方法では追いついていけないところがあるので、そういった方々に対する再教育等支援が必要なのではないかと考えている。

とにかく県としては県内就業につながると良いと考えている。そういった取り組みに対しては県としても支援を行っていきたい。

井上委員

県内就職率をさらにあげていただきたいと考えている。そのために県としても協力をしていきたい。

看護職にとって質の向上・維持をする上で現任教育は非常に大切である。そういったところでの支援に大変感謝している。

県からもこれまでに保健師が何人か大学院に通っている。個人で入学されるが、個人の学びで終わらず、組織へ還元がありその学びが非常に大きい。研究テーマをみるとハードルの高さも感じるが、結果として後輩育成等に良い結果をもたらしている。

コロナ禍で現任教育等や対面研修が満足に行えず市町村の保健師を含め人材育成の課題がある。効果的な地域保健対策を推進するためには看護大学の協力も得て、なんとか看護職同士の横の連携がもっと取れないかと感じている。また、市町村の保健師の業務は毎年増えており、そこは課題だと感じている。今年は県だけでなく市町村に多くの貴大学の卒業生が保健師として就職している。これは非常にうれしく、市町村保健師を含めた人材育成は県としても支援等を考えていきたい。

黒江委員

本学では開学以来、看護学の基盤は実践にあるという認識を持っている。そのために共同研究や看護実践研究指導事業に広がりを持っていった。

研究については、共同研究や看護実践研究指導事業、看護実践研究学会等多様な形がある。多様であるがゆえに分かりにくいという側面もあると感じた。また、看護職のつながりは現代だからこそ重要であると考えている。

資料5について、卒業後10年目以上の卒業者を対象とした調査は非常に珍しいものではないかと思う。その中で、「対象のその人らしさを意識し・・・」「日々の実践の中で課題を見つけ・・・」等の意見が大切なこととして出てくること自体が貴重な状況だと考えている。大学ではこのようなことが大切であるということに授業に取り入れている。それが現場でも大切だと思い、このような意見が出ることは、その卒業者が属している環境もこれらのことを大切にしようとしている環境であると分かる。卒業後10年目以上の卒業者を対象とした調査を今後も継続して行っていくものですので、その際にご支援いただきたい。

また、今年度の新卒者はコロナ禍で実習をうまくできていない卒業者である。この卒業者たちが一人前になるのにこれまでに比べて時間がかかると思うがご支援いただきたい。

青木議長

看護協会でも新卒者向けの交流会を実施している。これは病院の協力もありかなりの新卒者の方に参加していただいている。これまであまり周知ができていないが保健師の新卒者の方にも参加して頂きたい。

看護職は1年目、2年目の新人といった括りはあるが、その後についてラダーはあるものの中堅はどんなことができる看護師といったイメージが作れていない現状である。看護職は1年目であっても10年目であっても臨床の現場で行う業務は同じである。もう少しこれらを区別して生涯学習の研修も行えると良いのではないかと感じた。

保健師や在宅看護に行く方はまず大きい病院に就職するが、大きな病院としてはどうお考えでしょうか。

田口委員

本病院は急性期の病院である。自分のやりたい看護が急性期ではなく技術を学ぶために来られる方は一定以上いる。これは仕方のないことだと考えている。本病院としては地域の基幹病院として県として質の高い看護を実現するために本病院を1つの道として経験していただければ良いと思っている。

青木議長

病院側が技術を身につける最初の第1歩であるという認識を持っていただければ、県内から人を失わないことにつながるのではないかと感じた。ただ、学生側も急性期の病院というものを正しく理解していただかないといけないとも感じる。

【配付資料】

- ・会議次第
- ・出席者名簿
- ・看護の人材育成と活用等に関する連絡協議会設置要綱
- ・資料1 令和4年度卒業生就職・進路状況（施設別）
- ・資料2 令和4年度卒業生の就職選択について
- ・資料3 卒業生への大学の支援
- ・資料4 令和4年度卒業生への支援実施報告
- ・資料5 学士課程教育の成果と卒業生の看護実践状況
～卒業生および上司への面接調査から～
- ・資料6 大学院入学者状況
- ・資料7 学生及び学生の職場の同僚・上司による三者評価のまとめ
- ・資料8 岐阜県立看護大学の活動と地域との関係
- ・資料9 令和5年度共同研究一覧
- ・資料10 令和5年度看護実践研究指導事業一覧
- ・資料11 令和5年度「共同研究報告と討論の会」ご案内
- ・資料12 看護実践研究会会員への研究支援の実施状況
- ・資料13 年度別国家試験合格状況等

※岐阜県立看護大学大学院看護学研究科学生募集要項（2次募集）

※岐阜県立看護大学案内

※岐阜県立看護大学大学院案内

※看護研究センターパンフレット